

同文同種

愛甲次郎

戦前のことなり。北支の鐵道の車内にて日本兵酔ひて高歌放吟、他の乗客の響聲を買ふことありき。その場にありし一人の日本人紳士、咄嗟に筆を取り出し、「醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回」と認め衆に示す。多くのものこれに笑みを返すといふ。

これぞ同文同種の好個の例たる。今や高校にて漢文を教ふることもさらになしと聞けば、王翰の涼州詞を吟む日本の若者ははやかなるべし。

維新に先立つ我國の教養人は漢籍を日本語として讀むことを得たれば、かの國の古典は我が古典にてもありけり。

曾於太白峰前住

數到仙遊寺裏來

黑水澄時潭底出

白雲破處洞門開

林間煖酒燒紅葉

石上題詩掃綠苔

惆悵旧遊無復到

菊花時節羨君廻

日高睡足猶慵起

小閣重衾不怕寒

遺愛寺鐘欹枕聽

香炉峰雪撥簾看

匡廬便是逃名地

司馬仍爲送老官

心泰身寧是歸處

故鄉何獨在長安

これらの詩を清少納言とともに宮廷に仕へし公達の朝な夕なに唱へては愛でられしこと令和の世となりては得信ぜざることなり。

ただ昨今政治經濟の面における中國の擡頭著しければ、それに勢ひを借り懷舊の念白樂天に及ぶこともあながち之無しとせむ。

(令和三年二月十五日受附)